読書の価値（1）

日頃、本を読むことで、いろいろなものが頭の中に※インプットされる。多くは「知識」というデータである。これを頭の倉庫に沢山※ストックしている人が、いわゆる「知識人」とか「博学」などと呼ばれているようだ。

なんでも知っている人を、「歩く辞書」などと形容するように、覚えた知識をすぐに披露できれば、周囲から尊敬される。少なくとも、これまではそうだった。そういう人が「先生」と呼ばれ、教えを乞う人々が集まったのである。

しかし、その辞書は、つまり本である。辞書は歩かない。生きていない。だから、辞書を使う人が、言葉から調べなければならない。発音の順番で並んでいるので、少なくとも読み方を知っていれば、その意味を調べることができる。国語辞典や百科事典や英和辞典などがこれである（英語では、読み方ではなく、スペルを知っている必要がある）。

昔は、辞書というものが今ほど一般的ではなかっただろう。編纂することも難しいし、印刷して安く配布する技術もなかった。だから、①「歩く辞書」的な人が重宝された。

そもそも、頭の中に知識をインプットするのは何故だろう？　どうして頭の中に入れなければならないのか。それは、咄嗟のときに辞書など引いていられなかったり、人にきくことができない環境であれば、頭にストックしている価値がある。今は、みんながスマホを持っていて、なんでも手軽に検索できるのだから、この価値は下がっているだろう。

であれば、苦労して覚えなくても、ただ辞書を買って持っていれば良いではないか、という話になる。②ネットに依存している現代人の多くが、これに近い方針で生きているようにも見えてしまう。

しかし、そうではない。知識を頭の中に入れる意味は、その知識を出し入れするというだけではないのだ。頭の中で考えるときに、この知識が用いられる。じっくりと時間をかけて考えるならば、使えるデータがないかと外部のものを参照できるし、人にきいたり議論をすることもできるが、一人で頭を使う場合には、そういった外部に頼れない。では、どんなときに一人で頭を使うだろうか？

それは、「思いつく」ときである。

ものごとを発想するときは、自分の頭の中からなにかが湧いてくる。これは、少なくともインプットではない。ただ、言葉としてすぐに外に出せるわけでもなく、※アウトプットの手前のようなものだ。面白いアイデアが思い浮かんだり、問題を解決する糸口のようなものを思いついたりする。このとき、まったくゼロの状態から信号が発生する、とは考えられない。そうではなく、現在か過去にインプットしたものが、頭の中にあって、そこから、どれかとどれかが結びついて、ふと新しいものが生まれるのである。

（森博嗣『読書の価値』NHK出版　による。一部省略した箇所がある）

※インプット…入力。　ストック…ためておくこと。　アウトプット…出力。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1)　――線①「『歩く辞書』的な人が重宝された」のはなぜだと考えられるか。本文の内容に合うものを選びなさい。

ア　さまざまな知識を覚え、それをすぐに披露することは、尊敬に値することだったから。

イ　人々が知識を得るためには、知識人に本を編纂してもらわなければならなかったから。

ウ　昔は今ほど辞書が一般的でなく、知識をすぐに聞きだせる人はありがたい存在だったから。

〔　〕

(2)　――線②「ネットに……見えてしまう」とあるが、ここで述べられている方針に当てはまるものを選びなさい。

ア　日頃から本を読み、いろいろな知識を蓄えることが大切だ。

イ　ネット検索で調べられるので、物事を覚える必要はない。

ウ　調べる手間を省くためには、知識を身につけるべきである。

〔　〕

(3)　知識を頭の中にインプットすることに対して、筆者はどのように考えているか。適当なものを選びなさい。

ア　スマホで何でも手軽に検索することができるようになった現在では、知識をインプットすることの価値はなくなっている。

イ　単純な知識のインプットには現在では価値がないが、人と議論するときなどには知識をインプットする価値がある。

ウ　新しいものごとを思いつくときなどには頭の中の知識を使うので、知識をインプットすることには現在でも価値がある。

〔　〕